敵情判断はこれが概ね固つた昭和二十六、七月頃の判断を要約したものである。(1)

註(1)六月八日の御前会議に於ける兩總長の報告、六月に於ける軍令部の各「情勢判断」、七月一日大本營陸軍部調製の「昭和二十一年春頃を目途とする敵情判断」並本土各總軍司令部及聯合艦隊等の資料と関係者の記憶等を基礎とし筆者が綜合したものである。

米軍戦略判断　聯合軍特に米軍は有利なる戦勢に乗じ、更に空海作戦を激化して日本本土の無力化を策しつゝ一挙に日本本土に対し短期決戦を企圖するであろう。之が爲南西諸島（筆者註―奄美大島等）に於て更に基地を推進擴充しつゝ九月末（颱風期明け）(2)以降直路

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

九州、四国方面に上陸作戦を強行し、同地区に大空海基地を獲得した後明年春頃関東地方に上陸して最終決戦を求むる算が最も多い。(2)

註(2) 昭和二十年六月八日御前会議に報告された「世界情勢判断」に於ては米軍の九州、四国方面上陸を六月以降、関東上陸を初秋以降と判断されて居る。沖縄の戦況が悪化して居た四月末から六月に亘る時期には一時斯の様な判断も行はれた事實もあるが、万一と謂ふ用心感と多分に作戦軍の準備と政府の用意とを督励せんとする大本營の含みもあつた様である。七月に入つてからは本文の如き判断に固つた。

然し乍ら米空海軍の事前作戦に因り、日本の国内態勢特に本土の空軍が潰滅せりと判断した場合に於ては伊豆諸島に基地を推進しつゝ晩

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

秋の頃、一擧に関東地方に上陸し来ることも有り得る。(8)

註(8)此の判断は七月以降漸次薄らいだ。

尚右九州若くは関東地方に対する主作戦を容易にする爲、北海道特に帶廣平地、東北特に八戸平地方面に一部の牽制若くは陽動作戦を行ふことも予期せられた。

更に七月に入り、九州及関東方面の作戦準備が一応の目途が樹つに伴ひ、敵が本土の分断を策し、伊勢湾方面から名古屋、京阪神地区に進攻し来る場合も考慮せられた。此際一部が朝鮮海峡を突破して山陰沿岸に上陸することさへ懸念せらるゝ様になつた。(4)

註(4)敵の制海制空權が絶対的となり、六月十日、小樽沖に於ける才二大源丸の海没を契機として日本海に迄敵潜水艦が跳梁するに

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

及んで朝鮮海峡や津輕海峡の防備さへ自信が持てなくなつた。

以上の如き直路本土に進攻する戦略を避けて先づ中北支要域、南鮮要域の何れかに更に戦略基地を推進しその優勢なる空海軍の威力を完全に發揮したる後、本土に進攻し来るとても無しとしない。此の場合は本土と大陸とを完全に分断し且ソ連及中国に対する政略的目的も重要なる狙ひとするであろう。

この外米軍が本土周辺要域を攻略しその空海軍の威力を以て相当長期に亘り徹底した封鎖と焼爆作戦を遂行し、日本の屈服を求め而も猶日本の屈服を見ない場合は本土各要域に対して一挙同時進攻を企圖するかも知れないとの懸念も抱かれた。

米軍が本土進攻の爲使用すべき兵力量は地上兵力に就いては總兵力

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

六〇箇師団を超へることは無く、上陸作戦に使用し得る可動船腹と歐羅巴方面からの転用速度とを較量した結果昭和二十年八月頃以降は約一五箇師を、晩秋の頃には約三〇箇師団を昭和二十一年春には約五〇箇師団を本土攻撃に指向し得るものと推定した。而して昭和二十年秋先づ九州作戦を遂行する場合は一五乃至二〇箇師団を使用すべしとの結論に達した。(5)

直接本土攻撃に使用し得る航空兵力は基地航空約六千機空母搭載機約二六百(6)機海上兵力は各種軍艦四二四隻に上つた。(7)

註(5)歐州戦争終了時の米軍地兵總兵力判断は約一三〇箇師団であつた。そして昭和二十一年三月迄にこれを約一〇五箇師団に縮少しその中歐洲及本国に各一〇箇師団を配置するとの情報に基き

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

太平洋方面に充当し得る兵力は約八五箇師団と推定された。更に此中から南方戦場や中国大陸作戦等に充当する兵力を差引くと六〇箇師団を超へることは無いとの結論を得た。

尚太平洋の基地から本土に進攻する場合の所要船腹は三〇箇師団の場合は五　二五万屯、五〇箇師団の場合は八　七五万屯を必要とするとの検討が行はれ、英国船腹二　二〇万屯の増援を得れば此の作戦が可能であるとの判断に達した。

註(6) 米軍基地航空総兵力は約一万九千七百機と判断された。然しその中欧羅巴本国太平洋後方地域の控置兵力を控除し、本文の如き結論となつた。六千機の内訳は超重爆千五百機、重爆千四百機中爆千百機戦斗二千機と推定された。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

尚母艦搭載機は昭和二十一年春には更に三千百機に増加することが予想された。

註(7)此の判断は昭和二十年八月末頃の推定兵力で、その内訳は空母二六隻特空母七四隻戦艦二四隻巡洋艦三六隻駆逐艦二五四隻であつた。尚別に英国艦隊（空母一二隻戦艦六隻を基幹とす）の対日作戦参加が予想せられた。

斯の米軍戦略に関する我が判断は大綱に於て偶然にも概ね適中して居たことが戦後の米軍諸資料に依つて確認せられた即ち太平洋方面陸軍総司令官マッカーサー大将は太平洋方面海軍部隊総司令官ニミッツ提督と協力し、昭和二十年十一月三日を期し、第一第十一兵団より成る第六軍約一〇個師団を以て南部九州（宮崎及鹿児島県）に進攻し岡

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

地域に大空海基地を獲得したる後翌年春第一第八及び第十軍の三軍、二三箇師団一を以て関東に進攻し、日本軍に対し最終決戦を求め、関東平野特に帝都を攻略する計画であつた。前者をオリンピック作戦、後者をコロオット作戦と呼んで居た。本作戦準備の中途に於て日本軍作戦準備の裏をかく爲に、東北地方に上陸する作戦も研究されたが、討議に止つた様である。尚四国に対しては我が判断と異り九州作戦を容易にする爲の陽動作戦のみを企圖して居た。

他の関係連合国の戦略判断　英国は南方及香港等の失地回復、蘭印、佛印の政略要域の占領泰国への勢力伸長を主眼とする作戦を企圖するであろうが一部特に海軍を以て日本々土進攻に參加するであろう

重慶政權は対ソ警戒、対延安（中国共産黨政權）勢力伸長に努めつ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp